

平成26年度 老人保健事業推進費等補助金

老人保健健康増進等事業

認知症の人やその介護者の支援に関する地域の体制構築に関する
国際比較を行うための調査研究事業

宇治市

平成27（2015）年4月

目次

I. 研究の目的と事業実施の概要	1
II. 認知症の人やその介護者の支援に関する地域の体制構築に関する 国際比較に関する実態調査	
1. 目的	1
2. 報告（認知症サミット日本後継イベント宇治市視察）	1
①シンポジウム概要	1
②認知症対応型カフェ（れもんカフェ視察）	6
3. 調査実施対象	7
4. 実施方法	7
5. アンケート結果と考察	8
III. 本市における取組みと今後の課題について	
1. 報告（認知症フォーラムin宇治）	12
2. 概要	12
3. 経緯	12
4. 開催意義	12
5. 宣言の位置づけ	13
6. パネルディスカッション発言要旨	13
7. 認知症の人にやさしいまち・うじ宣言	15
8. 今後の課題	15
III. 資料編	17

I. 研究の目的と概要

認知症サミット日本後継イベントにおいて各国専門家9人が本市の取り組みを視察する機会を活用し、本市が目指す「認知症の人にやさしいまち・うじ」のあり方について検討を行う。

調査方法は、視察参加者全員に対するアンケート調査を主とする。また、視察の行程において、の意見交換等についても調査対象とする。

行程は、シンポジウムと認知症対応型カフェの2部で構成される。

シンポジウムでは、本市の認知症施策の全体像及び重点的に取り組んでいる「初期認知症総合相談支援事業」について紹介をし、質疑や意見交換を実施する。

認知症対応型カフェでは、事業を実施しているカフェレストランを会場として、視察参加者もカフェに参加するスタイルで実施し、認知症の人やその家族との交流や意見交換を実施する。

調査によって得られた結果から、世界から見た本市の認知症施策の有用性を検証し、今後の施策をより効果的なものとする。

II. 認知症の人やその介護者の支援に関する地域の体制構築に関する国際比較に関する実態調査

1. 目的

認知症施策を地域で推進するにあたっては、住民、医療サービス、介護サービス、行政等が有機的に連携され運営されることが重要である。我が国において、先進的な取組が行われている本市において、世界各国の研究者等による議論を得ること等により、今後の本市の認知症施策における「認知症の人にやさしいまちづくり」のあり方について検討する。

2. 認知症サミット日本後継イベント視察行程

①シンポジウム概要

日時：平成26年11月7日（金）11時40分～12時50分

会場：宇治川旅館

内容：本市の認知症施策の全体像及び重点的に取り組んでいる「初期認知症総合相談支援事業」について紹介をし、質疑や意見交換を実施する。

参加者：下表のとおり

	氏名	所属
1	Christian Berringer	Federal Ministry of Health
2	Teresa Di Fiandra	Ministry of Health
3	Tasanee Tantirittisak	Prasat Neurological Institute
4	Sabine Jansen	German Alzheimer Association
5	Geoff Huggins	Scottish Government
6	Tom Charles Kendal Knox Wright	AGE UK
7	Jon Rouse	Department of Health
8	Thomas W. Wallace	Eli Lilly and Company
9	Juergen Schefftlein	European Commission
10	真子 美和	厚生労働省老健局高齢者支援課
11	堀田 聡子	労働政策研究・研修機構
12	徳廣 三木子	認知症の人と家族の会京都府支部
13	山添 洋子	認知症の人と家族の会京都府支部
14	高野 憲一	京都府健康福祉部高齢者支援課
15	三ヶ月 浩也	京都府山城広域振興局
16	藤田 佳也	宇治市健康福祉部

17	横山 絵里	宇治市健康福祉部健康生きがい課
18	原 真弓	宇治市健康福祉部健康生きがい課
19	高橋 一浩	宇治市健康福祉部健康生きがい課
20	川北 雄一郎	宇治市福祉サービス公社

①-2 本市の認知症の取り組みについて

(資料編 認知症サミット日本後継イベント・宇治市視察用冊子(日本語版)を転載)

1. 宇治市の概要

宇治市は、京都府の南端に近く位置し、宇治川を中心とした風光明媚な景観と世界遺産「宇治上神社」「平等院」をはじめとする歴史・文化資源を有しており、宇治茶の産地としても知られるところです。

人口は約19万人、うち65歳以上の高齢者が約4万8千人で全体の25%を占めています。

1-1 宇治市の認知症事業の取り組み

宇治市では認知症の予防対策に早期から取り組んできた経過があり、認知症に関わるそれぞれの立場に立った事業を実施してきました。主に、予防、普及啓発、家族支援の3つがあります。

認知症予防として「認知症予防教室」を開催しています。運動やゲームを通じて参加者が交流し、楽しみながら、認知症を学び、生活習慣を改善します。

普及啓発として「認知症あんしんサポーター養成講座」を開催しています。地域に講師を派遣し、認知症の正しい知識と理解を伝え、同じ地域に暮らす認知症の人を支えるサポーターが地域に広がっています。あわせて、講師役の育成事業を実施しています。

家族支援として「認知症家族支援プログラム」を開催しています。認知症の人と家族の会の協力をえて、認知症の介護者に向けた講座や、交流の時間を設けて介護者が負担を抱えたまま孤立しないようサポートします。プログラム修了者でつくられたOB会の支援も併せて行っています。

1-2 宇治市の認知症ケアネットワーク

宇治市の認知症施策推進の基盤は、市内に6か所ある地域包括支援センター、2か所の認知症疾患医療センター、地域の医師会、介護保険事業所です。行政、医療、福祉、介護、家族の会が相互に連携し、認知症の人を支えるネットワークをつくっています。

成果物として、「もの忘れ連絡シート」という認知症の疾患と重症度を症状から見立てるシートや、認知症の支援の経過をまとめた「事例集」が作成されました。これらは、今日の宇治市の認知症ケアに欠かせないものとなっています。

2. 「認知症のイメージを変える。そのために突破しなければならない入口問題」

高齢化に伴い、認知症に対する関心が高まっています。しかし、依然、認知症のイメージはネガティブなものであり、それが認知症への正しい理解を妨げています。

認知症の人やその家族が医療やケアにたどり着く多くの場合は、症状が中・重度化してからです。その結果、在宅で生活を続けることが困難な状態となります。その状態が認知症であると捉えられてしまうことが、認知症のイメージがネガティブなものになってしまう理由の一つと考えられます。

認知症のイメージを変えるためには、決して認知症は特殊な病気ではないことを知ってもらうこと、支援の方法を確立することが重要です。そのためには、認知症の人との「出会いのポイント」を前にずらす必要があります。

次に、何が認知症の人が早期に医療やケアにたどり着くことを妨げる障壁となっているのか。これを森医師は「入口問題」と名付けました。

入口問題には二つの問題があります。一つは「ケアへのアクセスの問題」、一つは「ケアの対応力が不足している問題」です。

「ケアへのアクセスの問題」とは、医療の入口である“かかりつけ医”やケアの入口である“地域包括支援センター”まで辿りつくことが出来ない認知症の人、家族がいるということです。認知症に対するネガティブなイメージや「独居」「貧困」「孤立」「介入拒否」「複合的家族問題」などが要因です。

「ケアの対応力が不足している」とは、医療やケアにたどり着いても、認知症があると身体合併症に対する適切なケアが受けられない、支援体制が未成熟である、若年性認知症に見合った支援自体がない等の理由によりケアから排除されてしまうことです。我々はこの「入口問題」を乗り越えていくことが認知症のイメージを変えていくことであると認識し、これに挑むこととしました。

4. 「入口問題に対する宇治の挑戦－宇治市初期認知症総合相談支援事業－」

認知症になっても住み慣れた地域で生活を継続するためには、医療、介護及び生活支援を行うサービスが有機的に連携したネットワークを形成し、認知症の人とその家族への効果的な支援を行う地域づくりが重要です。

宇治市では、認知症ケアを推進するための医療と介護の連携強化や、地域における支援体制の構築を図るため「初期認知症総合相談支援事業」を2013年から開始しました。この事業は、宇治市が設置した第三セクターである宇治市福祉サービス公社に業務委託し、専任の認知症コーディネーターを配置し、地域包括支援センターと認知症疾患医療センターである京都府立洛南病院、宇治おうばく病院の協力を得て事業の運営にあたっています。

この事業は、「入口問題」の解決方法として、従来のケアの入口である、“かかりつけ医”と“地域包括支援センター”に加え、早期に認知症の人と出会う仕組みとして「認知症カフェ」と「認知症初期集中支援チーム」を設けました。

これは、認知症の人とその家族を入口で門を構えて待つのではなく、地域の中に認知症の人と家族が安心して過ごすことができる場をつくること、医療と福祉の専門職が認知症の疑いのある人に出向いていくことで、早期に認知症の人とその家族に関わる仕組みです。

併せて、65歳以上の市民を対象とした生活機能に関するアンケートから、認知症の予防が必要な市民に訪問し、「認知症カフェ」や「認知症初期集中支援チーム」、その他の認知症事業を周知し、支援の入口へ導きます。

また、啓発活動として、「認知症を正しく理解するための連続講座」を10回シリーズで開催しています。これには100名近い市民、医療・福祉専門職が現在受講しています。このように、認知症コーディネーターが中心となって多様な認知症事業を、施策として総合的に行っていることが宇治市の大きな特徴といえます。

ここからは、宇治市における初期認知症対策の要である二つの事業について紹介します。

5. 認知症初期集中支援チーム

先の「入口問題」を解決するための一つ目の手法が「認知症初期集中支援チーム」です。

早期対応の遅れから認知症の症状が悪化し、行動・心理症状等が生じてから、医療機関を受診しているケースや、ケアの場での継続的なアセスメントが不十分であるため、適切な認知症のケアが提供されていないケースが散見されます。こうした認知症の人に認知症の行動・心理症状等により「危機」が生じてからの「事後的な対応」を回避するために、「早期支援機能」と「危機回避支援機能」を整備し、これにより「危機」の発生を防ぐ「早期・事前的な対応」に基本をおくものとして、宇治市では2013年に国のモデル事業を受けて取り組みました。

宇治市のチームは専門医と医療職、福祉職の多職種で構成され、京都府立洛南病院・宇治おうばく病院の専門医ごとにチーム員会議の場を設定し、事例の検討、支援方針の立案を行っています。

(支援チームの流れ)

1. ケースの把握と情報収集

地域の中で認知症の不安を抱えながら、医療や介護サービスに結び付いていない人、あるいは、既に認知症が進行しているながら、本人の拒否や家族関係の脆弱性等から適切な支援が行われていないケースについて地域包括支援センター、かかりつけ医、関係者等から相談や情報提供を受けて、支援を必要とする対象者を把握します。

2. 初回訪問でのアセスメント実施

その後、チームの医療職と福祉職がペアで家庭を訪問し、所定のアセスメントツールを用いて、本人、家族の状況についてアセスメントを行います。ここで、宇治市独自の「もの忘れ連絡シート」を活用し、認知症の人の症状から、疾患と重症度についてもアセスメントを行います。加えて、本人や家族がどのような支援を必要とし、また、必要としていないのかについても確認します。

3. チーム員会議の開催

認知症専門医の他、医療職、福祉職で構成されたチーム員会議で、アセスメント結果について報告し、その場で認知機能の評価とある程度の鑑別診断を行います。そして、ケースの状況を踏まえた支援方針と計画を決めます。

チーム員会議には必要に応じて、かかりつけ医、担当ケアマネジャー、本人、家族が参加します。関わる情報を共有することで支援がより効果的なものになります。また、既にかかりつけ医があり、脳の画像を撮影できるケースについては、画像データを含めた検討をします。画像を確認することで、より精度の高い診断に基づいた支援が可能となります。

4. 初期集中支援の実施（訪問・関係機関との連携・医療受診支援）

チーム員会議で決定された支援方針に沿って、認知症コーディネーターは関係者と連携して集中的に支援を行います。支援は、介護保険サービスの調整や医療受診支援だけでなく、時には生活支援等の公的サービスの枠を超えた支援を行う場合もあります。

5. チーム員会議での報告と再検討、そして終了

その後のチーム員会議で集中支援の経過報告や結果報告を行い、進展具合に応じて支援方針の見直し等を行います。目標が達成されたと判断されれば初期集中としての支援は終了し、かかりつけ医や介護サービス事業者に引き継ぎを行います。引き継ぎ後も定期的にモニタリングを行い、サービスが継続できているか確認します。初期集中支援のサービスはすべて無料で提供されます。

認知症初期集中支援チームの特徴として次の3点があげられます。

1. アウトリーチ

入口問題で示したように、医療と介護の支援の入口で対象者が来るのを待つのではなく、医療と介護が外向いていくことが大きな特徴である。（本人や家族を動かすのではなく、支援者側が動く）

2. 認知症に特化したアセスメントツール

認知症に特化したアセスメントツールを用いて、認知症の状況を確認できることで早期に認知症の評価や課題の整理ができ、その結果、的確な支援を行うことができます。

3. 集中支援

従来の認知症の人、家族への関わり方と大きく異なるのは、医療と福祉の専門職の合議により立てられた支援方針に沿って、集中の名の示すとおり、時には強力に介入して環境を調整し、必要な支援を軌道にのせて生活を再構築することに主眼が置かれた点にあります。制度や機関の都合による縦割り型の支援ではなく必要な支援を途切れなく横断的に行うことが特徴です。

6. 認知症カフェ（れもんカフェ）

「入口問題」を解決するもう一つの手法が「認知症カフェ」です。

宇治市の認知症カフェの目的は3つあります。

第1に認知症の人や家族が安心して過ごせる居場所づくり。第2に認知症等の不安があ

る人、家族が医療機関や介護窓口に出向かなくても気軽に相談できる場づくり。第3に地域の人や専門職が初期の認知症の人と出会い、交流することで認知症について、正しい理解を深められる学びの場づくり。です。結果として地域の中に認知症の人、家族介護者、専門職、地域の人たちが出会える場所が形成され、これが目に見えるケアネットワークになっていきます。

宇治市の認知症カフェは「れもんカフェ」という名称で統一し、宇治市内6か所で開催しています。各地区に月1回又は3か月に1回の割合で開催しています。宇治市内では毎月2～3か所のカフェが開催されていることとなります。

カフェの場所は、喫茶店、レストラン、地域福祉センター（公共施設）、民家を利用した地域サロンを活用しています。

れもんカフェは3部構成になっており、第1部では専門医による認知症についてのミニ講演。第2部では地域の音楽家によるミニコンサート。第3部ではカフェ・交流タイムで参加者が自由にコーヒーを片手に語らう時間。そして、カフェ終了後には専門職のスタッフが個別のご相談に応じます。

カフェには毎回、認知症の人、家族、地域の人、医療・福祉専門職が普段着で参加するため、カフェでは誰が当事者で誰が専門職かの区別がありません。誰もが地域住民として普通にカフェに参加できます。しかし、認知症の人に対しては行き届いた配慮がなされ、認知症の人が安心して過ごせる場づくりを行っています。

今日はこの後、その一つであるカフェに参加していただき、認知症の人や家族との交流を図っていただきます。

10. 「認知症の人にやさしいまち 宇治を目指して」

こうした事業を通して、現在宇治市では「認知症の人にやさしいまち 宇治」を目指した宣言を出す準備を、山本市長のリーダーシップのもと進めています。

「認知症の人にやさしいまち 宇治」とはどういう姿なのだろう。

認知症の人を地域から排除しないまち

認知症の人を抱える家族介護者を地域でサポートするまち

認知症の人がカミングアウトできるまち

認知症の人は早期のうちに、各々の症状に応じて適切な医療とケアが受けられるまち

認知症の人が地域活動に参加できるまち

認知症のひとが自分らしく暮らせるまち

認知症になっても安心して暮らせるまち

ご紹介した初期認知症総合相談支援事業をより地域に浸透させていくことと併せて、今後は、認知症当事者抜きで「認知症の人にやさしいまち」の姿を語らないために、認知症当事者による提言を図るワーキングチームの立ち上げや、医療、福祉、介護の領域を超え、商工、観光等各種団体、企業等様々な団体による認知症行動連盟（Dementia Action Alliance）の設置等、真に「認知症の人にやさしいまち」を目指す取り組みを加速していく必要があります。宇治市では、その環境が整いつつあります。

12. おわりに 京都式オレンジプランの10のアイメッセージ

京都では日本国内で唯一、独自の認知症推進施策計画を設けています。最大の特徴は認知症当事者家族の立場から見た、「認知症になっても安心して暮らすことのできる地域社会を実現していくための10のアイメッセージ」をプランの成果指標としたことです。

「認知症の人にやさしいまち 宇治」宣言は、正にこのアイメッセージの実現に自治体として取り組んでいく決意の現れでもあります。

1. 私は、周囲のすべての人が、認知症について正しく理解してくれているので、人権や個性に十分な配慮がなされ、できることは見守られ、できないことは支えられて、活動的にすごしている。

2. 私は、症状が軽いうちに診断を受け、この病気を理解し、適切な支援を受けて、将来について考え決めることができ、心安らかにすごしている。

3. 私は、体調を崩した時にはすぐに治療を受けることができ、具合の悪い時を除いて住み慣れた場所で終始切れ目のない医療と介護を受けて、すこやかにすごしている。
4. 私は、地域の一員として社会参加し、能力の範囲で社会に貢献し、生きがいをもってすごしている。
5. 私は、趣味やレクリエーションなどしたいことをかなえられ、人生を楽しんですごしている。
6. 私は、私を支えてくれている家族の生活と人生にも十分な配慮がされているので、気兼ねせずにごしている。
7. 私は、自らの思いを言葉でうまく言い表せない場合があることを理解され、人生の終末に至るまで意思や好みを尊重されてすごしている。
8. 私は、京都のどの地域に住んでいても、適切な情報が得られ、身近になんでも相談できる人がいて、安心できる居場所をもってすごしている。
9. 私は、若年性の認知症であっても私に合ったサービスがあるので、意欲をもって参加し、すごしている。
10. 私は、私や家族の願いである認知症を治す様々な研究がされているので、期待をもってすごしている。

①-3 本市の取り組みについての質疑応答

- Q. ケアがうまくいっているかどうかはどのように判断しているのか？
- A. 今までも認知症に関する相談はあったが、症状が進んでからの相談が多く、初期の人と出会うことは少なかった。この事業は昨年度からだが、初期の認知症の人と出会うことが多くなったと実感している。評価は、10のアイメッセージができていくかということの評価していくことになるが、当事者へのインタビューが始まると言われているため、その時に成果として出てくると思っている。
京都府の特徴として、京都府にはオリジナルの京都式オレンジプランがあり、当事者の10のアイメッセージを掲載している。
- Q. カフェ以外のものはあるのか？
- A. 認知症にやさしい場所をつくることはもちろん、認知症の人にやさしい人をつくるのが大事だと思っている。専門のスタッフでさえも、まだ、正しい理解ができていないものもある。正しい理解の普及として、市民講座等、周知する場所を増やしていきたいと考えている。

②-1 認知症対応型カフェ（れもんカフェ）視察

時間：14時～16時

会場：Reos榎島（リオスマキマ）

内容：第1部ミニ講演

講師：森俊夫 京都府立洛南病院副院長

（内容：資料編1～3を参照のこと）

第2部ミニコンサート

演者：シンガーソングライターゆきこさん

第3部カフェタイム

②-2 認知症対応型カフェでの各国専門家からの質問

- Q. 参加者がカフェへの参加に至るまでの経緯は？
- A. 初期集中支援チームからの紹介や、地域の参加者、地域包括支援センターや医院からの紹介で参加されています。
- Q. カフェの開催頻度は？
- A. リオスでは月1回、その他5か所で行っており、年間32回実施しています。1か月に2回から3回は、カフェを行っています。

- Q. カフェ以外で当事者たちは、どの程度の頻度で会っていますか？
- A. テニス教室は週 1 回、その他ワインカフェを一度行いました。絵画教室は 2 週間に 1 回。これらの教室とは別に、家族同士で頻繁に会っています。
- Q. このカフェは、いつもはカフェとして機能しているところなのですか？相談センターのようなところなのですか？
- A. 普段はレストランです。
- Q. ドイツでは独居の高齢者が多いが、日本ではどうですか？独居の人にはほかに居場所があるのですか？
- A. 宇治にも独居高齢者は多いです。その人にはアウトリーチしてカフェにつないでいます。
- Q. ボランティアの参加はありますか？
- A. カフェの始まりがボランティア中心で始まりました。今は市が開催しているため以前から協力しているボランティアと、スタッフが半々です。

②-3 認知症の人と家族の会から各国専門家への質問

- Q. ほかの国の家族会の活動を知りたいです。
- A. 民間やボランティアが中心です。
- Q. 家族間で介護されている人が多いですか？
- A. 配偶者や子どもが介護しています。家族だけで介護が難しくなったら在宅サービスを入れて、それでも難しい場合は、専門の施設があります。
- A. ドイツでもまずは配偶者や子どもが介護し、対応しきれなくなると在宅サービスを利用しています。

総評：「この短期間で組織的なプログラムができていることは、素晴らしいと思います。」

3. 実施対象

認知症サミット日本後継イベント・宇治市視察各国参加者 9 人
参加者氏名、所属、国籍は、以下のとおり

	名前	所属	国籍
1	Christian Berringer	Federal Ministry of Health	GERMANY
2	Teresa Di Fiandra	Ministry of Health	ITALY
3	Tasanee Tantirittisak	Prasat Neurological Institute	THAILAND
4	Sabine Jansen	German Alzheimer Association	GERMANY
5	Geoff Huggins	Scottish Government	UK
6	Tom Charles Kendal Knox Wright	AGE UK	UK
7	Jon Rouse	Department of Health	UK
8	Thomas W. Wallace	Eli Lilly and Company	CEO
9	Juergen Schefflein	European Commission	EU

4. 実施方法

アンケート調査 悉皆・自由記述式

シンポジウム及び認知症対応型カフェ視察の事前と事後とでアンケートを実施した。

アンケート内容は、以下のとおり

事前アンケート

1. 「認知症の人に優しい街づくり」施策の位置づけ
What status do measures for dementia-friendly community development occupy?
2. 「認知症の人に優しい街づくり」の目的
What are the aims of dementia-friendly community development?
3. 「認知症の人に優しい街づくり」の基準・成果指標
What benchmarks and results indicators are applied to dementia-friendly community development?
4. 「認知症の人に優しい街づくり」を推進する枠組み
What frameworks are adopted for facilitating dementia-friendly community development?
5. 認知症施策の課題は何ですか？
What challenges are involved in dementia measures?
6. 認知症施策で優れている点は何ですか？
What are the best aspects of dementia measures?
7. 市民の認知症に対するイメージは？
How do city residents regard dementia?
8. 家族支援としてどのような取り組みをされていますか？
What kinds of initiatives are being pursued for family support?

事後アンケート

1. 宇治市の認知症施策について感想をお聞かせください。
Please tell us your impressions of Uji City's dementia measures:
2. 認知症カフェの感想をお聞かせください。
Please tell us your impressions of the "Dementia Café" event:
3. 宇治市への意見・助言があればお聞かせください。
Please feel free to share any opinions or advice you might have for Uji City

5. 結果と考察

(各国専門家のアンケート回答内容については、資料編5を参照のこと)

①結果(事前アンケート)

1. 「認知症の人に優しい街づくり」施策の位置づけ
What status do measures for dementia-friendly community development occupy?
「認知症の人の優しい街づくり」は、国や地域における「目標」としての位置づけとなる。その目標を達成するために国や地域ごとの特性に応じて社会資源のネットワークを構築することが求められる。
2. 「認知症の人に優しい街づくり」の目的
What are the aims of dementia-friendly community development?
現在の認知症の人が暮らしにくい社会を変えていくためには、「認知症の人にやさしい街づくり」が求められる。その背景には、認知症に対する偏見が存在することを示している。社会が認知症の人やその家族に対してのかかわり方が最も重要となる。認知症の人ができるだけ地域で自立して尊厳を持って暮らせることは、高齢者の在宅生活の限界点を高めることにもつながる。生活の質(Quality of Life)を向上させるには、社会

参加の場があり、適切な支援や診断、サービスが受けられる環境が整っていること。周囲の理解や共感を醸成していくことが、基盤として必要である。

3. 「認知症の人に優しい街づくり」の基準・成果指標

What benchmarks and results indicators are applied to dementia-friendly community development?

「認知症の人に優しい街づくり」の基準・成果指標を設けることができているところはまだない。数値的な基準では、認知症の教育を受けた人の数、認知症の診断を受けた人が在宅で生活している数、認知症に関わる専門職の配置数といった回答がある。政策的な基準では、認知症のワーキンググループによる施策の評価に取り組むといった動きがある。認知症の人が自ら施策を評価すること、認知症の人に優しい街づくりについて議論することができる地域があることがこれからの成果指標になっていくものと考えられる。

4. 「認知症の人に優しい街づくり」を推進する枠組み

What frameworks are adopted for facilitating dementia-friendly community development?

適時適切な診断や支援を達成するために目標の数値化し、各分野（健康・社会・教育・環境）間が横断的に取り組めるよう政策の強い役割をもって促進させていくこと。一律でなく個々に応じたサービスの提供や地域とのつながりをデザインしていくこと。といった回答から、共通の明確な目標をもって一体的に取り組むことが求められる。一方で、大きな枠組みの中に、認知症の人を多面的にとらえて、地域の実情にあわせたオーダーメイドの支援に取り組むことが必要であると考えられる。

5. 認知症施策の課題は何ですか？

What challenges are involved in dementia measures?

認知症に対する偏見を取り除いて、正しい理解を求める普及啓発が課題となる。この点においては、地域性によって、程度の差があるものの共通の課題であると言える。次の段階では、いかに協力者を増やしていくことができるか、その協力者たちを協調させることができるか、といった課題がでてくる。また、地域の理解、協力の先に、認知症の人の視点を届けることができるか、その方法が確立されていないことが課題となってくる。施策の進行に応じた課題があり、それをいかに解消していくかは、各地域での取り組みの好事例の中から見出していくことになるだろうと考えられる。

6. 認知症施策で優れている点は何ですか？

What are the best aspects of dementia measures?

認知症の人が地域の中で、家族と暮らし続けられる、認知症の人がもつ能力を大事にし、自立を促す、といった回答から、在宅生活の継続を可能にすることがポイントになっている。それは、個々の応じた適切なケア体制があり、地域の理解と介護者への支援などの基盤が整っていることを示している。また、当事者が自覚することは、非常に重要である。

7. 市民の認知症に対するイメージは？

How do city residents regard dementia?

市民の理解が進んではいるものの、その理解の度合いは地域によって様々である。知識から得られる理解だけでは限界があり、実際の関わりを通じて得る経験の積み重ねが必要となる。

8. 家族支援としてどのような取り組みをされていますか？

What kinds of initiatives are being pursued for family support?

家族支援者が抱える課題への支援として、相談を受け助言をする、専門的なカウンセリングや医療的な支援など自身の心身の健康の維持。休息をとれること、周囲に支援者を支える環境が整備され、加えて専門的な支援体制があることが必要である。

②結果（事後アンケート）

1. 宇治市の認知症施策について感想をお聞かせください。

Please tell us your impressions of Uji City's dementia measures:

医療と支援とが連携した包括的なアプローチであるとの回答から、認知症疾患医療センターのバックアップのもと地域包括支援センターを起点とした、医療と介護への連携体制の構築をベースとして、認知症コーディネーターを中心に配置した地域に根差したネットワーク形成が評価された。

2. 認知症カフェの感想をお聞かせください。

Please tell us your impressions of the "Dementia Café" event:

カフェがもつ雰囲気とそこに集う人たちの生き生きとした様子や、地域コミュニティと専門的支援が一体となった場合は、参加者それぞれのもつ可能性を高めるものであると評価された。

3. 宇治市への意見・助言があればお聞かせください。

Please feel free to share any opinions or advice you might have for Uji City

現在の取り組みを今後も推進していくことを希望される意見が多く、本市の取り組みの方向性が指示されたものと捉えられる。

③考察

各国専門家からの意見から「認知症の人に優しい街」を実現するためには、課題が3つあると考えられる。1つは地域住民の正しい理解と協力体制、2つは専門分野における支援体制の構築と支援者の育成、3つは1と2をつなぎ、地域の実態に応じた統合的な認知症ケア体制を確立することである。

地域住民の正しい理解と協力体制については、認知症に対する偏見を取り除くことの上で成立するものである。身近に正しい理解を学ぶ機会をより多く設け、浸透させていく必要がある。普及啓発が進んでいくことで、協力者が地域の中で生まれてくる。これを有効に活用するための体制整備を進めることで、地域全体で認知症の人を支える基盤をつくることができる。

専門分野については、各職種の専門性を向上させることに加え、多職種が連携して、認知症の疾患や症状、さらには個性に適した質の高い支援を追求していくことで、認知症ケアの水準を面的に高めていくことができる。これにより、適時適切な支援のもと、在宅での生活を継続することが可能となる。

個別の取り組みが有効に機能していたとしても、認知症の当事者や家族の視点に立った場合、それが連続しておらず、途切れていては、その効果は半減する。そこで、地域の認知症の取り組みに目標、理念を掲げることで、個別の取り組みに一貫性を持たせることができると考えられる。

そのためには、目標や理念は、世代や立場にかかわらずに共通するものである必要がある。これを宣言として、自治体の首長が行うことは、大きな意義を有するものとなる。

宣言にあたっては、何を主眼とするか、何を目指すのかを明確に定めることになる。判断に迷ったときに、そこに立ち返れば自ずと答えにたどり着けるように。また、宣言には、実行可能性を持たせ、今後の施策展開の基礎となりえるものであることも必要となる。

本市においては、早期からの支援体制づくりの推進により、認知症の当事者とその家族が、

認知症であることをオープンにして、当事者自身が認知症とともに生きることを伝えられる環境ができてきている。

認知症を当事者の視点から語ることは、認知症の正しい理解を大きく促進し、支援のあり方や、施策の方向性に大きな影響を与えることになる。

本市で取り組んでいる認知症に関わる人たちのそれぞれの視点に立った取組みは、認知症コーディネーターの配置により一体的なものとなり、認知症対応型カフェが認知症の人とその家族、地域住民、専門職の垣根を越えたつながりを生み出した。認知症の人や家族が前向きに認知症と向き合い、新しい世界を広げていく姿を見ることは、各国の専門家らから有効な施策であるとの見解を得た。

理念としての宣言と認知症の当事者の存在が「認知症の人に優しい街づくり」を実現させるものであると考えられる。

「認知症の人に優しい街づくり」は、すべての人に優しい街づくりと同義であるといえる。認知症の人を中心として、その家族、地域住民、社会資源、医療・介護等の専門分野のそれぞれが役割を持って知識や経験、専門性を高めながら、認知症の人と家族が在宅で生活を継続できるよう、とぎれないネットワークを構築することである。それぞれが個別に取り組むのではなく、共通の目標をもつことで、統合的なケア体制へとつながり、認知症の人が自分らしく認知症とともに生きていける「認知症の人に優しい街」をつくることにつながっていくものとなる。

Ⅲ. 本市における取組みと今後の課題について

1. 認知症フォーラムin宇治（第2回検討委員会）の開催

アンケートの実施及び検討を経て、本市の認知症施策の方針を定めた。

「認知症の人にやさしいまち・うじ」の宣言により共通理念をもち、認知症の人の視点に立った認知症施策の推進していくことである。

2. 概要

日時：3月21日（祝日）午後1時半～午後4時半

会場：生涯学習センター

対象：市内在住・在勤の人

定員：先着200人

参加費：無料

内容：

- i 対談「認知症当事者から見た、認知症の人にやさしいまち・うじ」
認知症当事者と家族 伊藤俊彦さん・元子さん夫妻、森俊夫さんによる対談
- ii 宇治市の認知症への取り組み報告
れもんカフェ（認知症対応型カフェ）と初期集中支援チーム
- iii パネルディスカッション「認知症の人にやさしいまち・うじ」を目指して
山本正宇治市長、樋川毅さん（宇治おうばく病院認知症疾患医療センター長）、門阪庄三さん（宇治久世医師会在宅医療担当理事）、中西美幸さん・俊夫さん夫妻（認知症当事者・家族）、森下良亮さん（北宇治地域包括支援センター長）、森俊夫さん（進行役）
- iv 総合討論とまとめ
「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けた宣言

3. 経緯

本市は、認知症への取組みとして認知症の予防、普及啓発、家族支援を先駆的に実施してきた。また、市内に2か所の認知症疾患医療センターが配置されており、医療、介護、福祉、行政の各専門分野をつなぐ宇治市認知症ケアネットワークがつけられている。

平成25年度から、初期からの認知症ケアとして、地域の高齢者窓口である地域包括支援センター起点とした、「初期認知症総合相談支援事業」を開始し、認知症コーディネーターを地域包括支援センターのうち1か所に配置し、「認知症対応型カフェ」「認知症初期集中支援チーム（国モデル事業）」を実施。事業を一体的に推進する体制を整備した。

早期からの認知症ケア体制の確立により、本市の認知症ケアの基盤が整い、平成26年5月に山本正宇治市長が「認知症の人にやさしいまち・うじ」の宣言を目指すことを発表した。以降、市長のリーダーシップのもと、事業を展開してきた。

平成26年11月の認知症サミット日本後継イベントにおいて、市長と本市の認知症当事者チームが、各国の専門家と認知症対応型カフェで交流した経験は、認知症当事者や家族に大きな変化をもたらし、自らメッセージを発信することへとつながった。そして、平成27年1月に示された認知症国家戦略（新オレンジプラン）の要である認知症の人やその家族の視点の重視は、本市が目指す姿に一致するものである。

この流れを受けて「認知症フォーラムin宇治」を開催し、「認知症の人にやさしいまち・うじ」実現に向けての市長が宣言を行うものとした。

4. 開催意義

これまでの本市の認知症への取り組みの集大成として、関係機関や市民に広く、宇治市の取り組みを知ってもらうとともに、認知症当事者の視点を中心に、関係機関が横断的に連携し、全住民参加の施策を推進していく契機とする。

5. 宣言の位置づけ

「認知症の人にやさしいまち・うじ」を共有理念とし、認知症の人とともにまち全体で、認知症の人が住み慣れたまちで自分らしく安心して暮らし続けられるように絶えず努力をしていくことの宣言。

6. パネルディスカッション発言要旨

①山本正宇治市長

宇治市は、「健康長寿日本一」のまちづくりに取り組んでいます。これからのまちづくりは、高齢者が元気で輝いている、活気あふれるまちでなければなりません。

宇治市は、平成 26 年 4 月に、人口に占める 65 歳以上の高齢者の割合が、25 パーセントを超えました。4 人に 1 人が高齢者、という状況です。

65 歳を迎えると、高齢者の仲間入りとされますが、私も含めて、宇治市には、まだまだこれから、もっともっとがんばっていこう、「ふるさと宇治」を元気にしていこう、と熱意をもっておられる方が、たくさんおられます。

そうした高齢者の方々が、活躍できる場をどんどん広げて、元気や勇気もらって、活力ある宇治市を、つくっていきたいと思っています。

平均寿命が 80 歳を超え、高齢者人口が増えていく中で、同じように、認知症の人も増えています。団塊の世代が、後期高齢者である 75 歳以上を迎える 10 年後には、高齢者のうち、認知症の人の割合は、5 人に 1 人に上昇する見込みであることが、厚生労働省から報告されています。宇治市が目指す「健康長寿日本一のまち」は、認知症になっても、「ふるさと宇治」で、安心して暮らせるまち、にしていかなければなりません。

宇治市では、これまで認知症の「予防」、「普及啓発」、「家族支援」に先駆的に取り組み、認知症ケアのためのネットワークづくりに努めてまいりました。そして、平成 25 年度には、これまでの事業の成果や、ネットワークを活かして、新たに早期からの支援体制づくりを始めました。それが、先に報告のあった、認知症コーディネーターを中心とした、「れもんカフェ」や「認知症初期集中支援チーム」です。

宇治市は、これまでに、認知症への取り組みを進める中で、地域の関係機関との連携を強めてきました。

医療の面では、「認知症疾患医療センター」が 2 か所配置され、医療機関には、「もの忘れ外来」、地域に密着した身近な「かかりつけ医」、の存在があります。介護の面では、状態に応じた最適なケアが受けられるよう、サービスや施設を利用することができます。また、高齢者が抱える様々な課題を、包括的にサポートする、「地域包括支援センター」が、地域の窓口として設置されています。それぞれの専門職が、日々の研鑽を積み、宇治市全体の認知症ケアの水準を高めています。ここに、「認知症コーディネーター」を、ネットワークの中心に配置することで、認知症の早期の段階から、人生の終末に至るまで、より統合的な認知症ケアを、推進していくことができます。

そうした専門分野での基盤に加え、私は、最も重要なのが、市民一人ひとりの力であると考えています。認知症になっても、住み慣れたまち・うじで暮らし続けるためには、日々の暮らしの中で、認知症の人とかかわる家族や、近隣の住民、商店や、交通、金融機関、など様々な人や場所、場面での理解と支援が求められるからです。

市民一人ひとりの思いやりで、認知症の人は自分らしく、人生を楽しむことができるはずです。

②樋川 毅氏

まだまだ精神科への受診は抵抗が大きいのか当院への受診は認知症だからという理由より認知症によって様々な問題、妄想が出て周囲を攻撃するとか生活がなりたたなくなっただけなどが出現してから来られる方が圧倒的に多い状態です。当然、認知症として初期の方よりも中等度・高度と進行した方が大多数を占めています。ただ、国が率先して認知症についての啓蒙活動を行っていることから初期の方の受診も徐々に増えています。

まずは周囲の人が認知症について知ることです。認知症の人が場にそぐわない行動をしても、認知症について知識があれば少なくとも感情は別として頭では「病気でこういう行動がでているんだ」と理解できます。「何でこんなことをするんだ」と全く理解できない場合と対応が違ってくることが多くなってくると思います。それだけ衝突することが減り認知症の方も周囲の人もストレスがかかることが減ると思います。そして認知症について知識を増やせば周辺症状の原因がわかるかも知れません。原因がわかればどのように対応や環境を変えれば症状が出なくなるか考え付くかもしれませんし、原因がわからなくてもこういう症状にこう対応したらうまくいったという例を知れば試してみると症状が消えることもあるでしょう。あと介護サービスなどを利用するというのも大切です。介護サービスの職員さんに対応について相談するというのもありますが、サービスの利用によって家族が心の余裕を持つことも目的です。想像してもらえばわかると思いますが、一緒にいる家族がイライラしたり疲れて元気がなかったりするとこちらも落ち着かなく感じます。認知症の方でも同じで、そのことが周辺症状のきっかけや、悪化する原因となりえます。家族が少しでも心の余裕を持つという意味では家族以外の周囲の人が認知症について理解を持つことも大切だと思います。

認知症の症状を進ませないこと、認知症の介護者のストレスを増やさないこと、認知症の初期に気付くことのためには認知症について知っていないといけません。ある意味当たり前前のことかもしれませんが、みんなが認知症についてよく知っていくことが「認知症のひとにやさしいまち」として必要なことの一つではないかと思います。

③門阪庄三氏

初期の認知症こそかかりつけ医の仕事です。加齢に基づく認知症の人は内科疾患があるため認知症と生活習慣病の両方の治療が必要です。「治す」よりも「支える」ことは内科医の得意分野です。かかりつけ医が地域包括支援センターや居宅介護支援専門員と連携して、早期診断や介護へのゲートオープナーの役割を担うのです。

④中西美幸氏・俊夫氏

美幸氏：認知症になっても家の中に閉じこもったりせず、外に出ていくことが大事です。
俊夫氏：認知症であることを隠さず、オープンにすることで今では多くの人から支えられています。妻には100人の支援者がいます。

⑤森下良亮氏

地域活動の共通認識として、認知症の人をどのように支えていくのか、隣近所の問題だけではなく、地域でかかわる意識を高めていく必要があります。特に一人暮らしの高齢者など、変化に気づく人が周りに少ないことで、知らず、知らずのうちに、認知症が進行していることがよくあります。この変化に気づきやすいのは、普段生活を共にしている家族であり、一人暮らしの方にとっては近隣の方々になります。そのためにはお互い様であることを前提に、互いの変化に気づくことができる普段からのコミュニケーションが大切です。自分では何となく気づいてもはっきりとはわからない、また認めたくないのが認知症という病気です。今の世の中、何でもが便利になり、他人に頼ることが少なくなってきたのではないのでしょうか。昔は醤油や砂糖を近所で借りたり貸したりと

何気ない協力体制があり、その中で生まれたコミュニケーションも多く、互いの変化にも気づく機会があったと思います。そのように振り返ると今は他者への興味も昔に比べて減ってはいないでしょうか。地域づくりに必要な要素はお互い様の精神であり、他者への関心というのも大切だと思います。

専門職であり、支援者たる自分たちは、「気づく感じる能力」を高めていきたいと考えております。

⑥ 認知症の人にやさしいまち・うじ宣言

悠久なる宇治川の滔々(とうとう)たるながれ、心安らぐ茶のかおり、宇治には伝統と文化を大切にし、そこから新しいものを生み出し、わたしたちのまちを築いてきた風土があります。

超高齢社会を迎え、ある時は認知症の人を支える側として、そしてある時は認知症の当事者として、誰もが認知症とともに生きる時代になりました。

認知症を避けようとすることは、自分自身や周りの大切な人を避けることと同じです。認知症を受け入れ、その人のありのままの姿をしっかりと見ることによって、認知症とともに生きる技術、知恵、文化を築くことができます。

認知症になっても、これまでの人生で積み重ねた知識や経験を活かしてできることがたくさんあります。なにより、認知症の人が自ら語り、心豊かに暮らしている姿は、わたしたちの未来を明るく照らす道標になります。

わたしたちは約束します。

- 一. 認知症の人の想いやその人らしさを尊重し、思いやりをもって行動します。
- 一. 認知症を正しく理解し、世代や立場を超えてつながり、まち全体で支えます。
- 一. 認知症の人が人生の最期まで安心して暮らせるまちを共につくります。
- 一. 認知症になっても、希望や生きがいを持って認知症とともに生きていきます

この約束をわたしたち一人ひとりが深く心に刻み、誰もがふるさと宇治で自分らしく、尊厳を持って、認知症とともに生きていける「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現のために歩み続けることを宣言します。

平成27年3月21日
宇治市長 山本 正

7. 今後の課題

既存の資源を効果的に発展させるとともに、認知症の人や家族が求める施策に積極的に取り組んでいく必要がある。

制度面でのサポートをさらに充実させるとともに、本市全体で認知症の人の視点に立った、正しい理解を広げ、認知症とともに生きるまちづくりを推進していく。

これまで、偏見のために認知症を隠すことや、受診をしないことで、症状が重症化して、ケアが介入するところには在宅での暮らしをあきらめざるを得ない状況が散見されていた。これからは、認知症を受け入れ、抵抗なく早期からの受診ができ、症状や進行に応じて本人の望むケアの道筋を立てた暮らしができるよう環境を整備し、地域の中での見守り、声掛け、手助けを誰もができるまちをつくることで、認知症の人が日常生活において、工夫をしながら積極的に自分らしく活動できるまちへと発展させていく。

i 行政・専門分野における検討課題

- 認知症当事者家族によるワーキングチームを立ち上げ、施策の PDCA サイクルに当事者の意見、視点を取り入れる。
- 症状と進行に応じたケアルートの明確化と情報の発信（宇治市版ケアパス）
- 認知症の診断を受けた人に寄り添いサポートする専門職（リンクワーカー）の配置
- 認知症に関する拠点の設置
- 若年性認知症の人への支援の充実
- 行政職員の認知症への正しい理解と対応力アップ
- 専門職（医療、介護、福祉）のパーソンセンタードケアに基づく認知症ケアの水準の向上
- 関係機関とのより一層の連携強化、統合的なケアネットワークへと発展させる。
- 医療・介護連携の推進
- ii 地域における検討課題
- 認知症の人が安心して過ごせる場、活躍できる場づくり
- 認知症あんしんサポーターを量・質ともに高め、活動できる仕組みづくり
- 学校教育での啓発の推進
- 民生児童委員や学区福祉委員など地域の顔となる人材との協力のもと地域に根差した支援体制づくり
- 行方不明高齢者の SOS ネットワークづくり
- 家族介護者が正しい認知症ケアを学べる場づくり

IV. 資料編

1. 認知症対応型カフェ ミニ講演資料（英語版・日本語版）
2. 認知症サミット日本後継イベント関連資料（京都の軌跡）（英語版・日本語版）
3. 認知症サミット日本後継イベント関連資料（若年性認知症テニス教室と認知症カフェの成立過程）（英語版・日本語版）
4. アンケート用紙
認知症サミット日本後継イベント・宇治市視察に於いて参加者に配布したアンケート用紙
5. アンケート回答一覧
各国専門家のアンケート回答の一覧
6. 認知症サミット日本後継イベント・宇治市視察用DVD
シンポジウムの際の宇治市の取り組みの概要を紹介するために作成したVTRのDVD。初期認知症総合相談支援事業（認知症初期集中支援チーム、認知症対応型カフェ）の紹介を中心に、宇治市の取り組みを網羅した内容。
※インターネットでも掲載：
宇治市福祉サービス公社ホームページ(<http://www.poppo.or.jp/>)「認知症の人にやさしいまち・うじ」バナーにて
7. 認知症サミット日本後継イベント・宇治市視察用冊子（英語版・日本語版）
上記6を冊子化したもの
8. 平成23年度版宇治市もの忘れ連絡シート（英語版・日本語版）
認知症初期集中支援チームで使用している宇治市独自のアセスメントシート
9. 認知症対応型カフェ（れもんカフェ） テーマソング「れもんの和」CD
認知症サミット日本後継イベント宇治市視察を記念して京都府地域包括ケア推進機構と共同作成した。認知症フォーラムin宇治にて参加者に配布した。
10. 認知症フォーラムin宇治 ちらし
平成27年3月21日に開催された「認知症フォーラムin宇治」の広報用ちらし
11. 認知症の人にやさしいまち・うじ宣言
平成27年3月21日に開催された「認知症フォーラムin宇治」にて行った「認知症の人にやさしいまち・うじ」の市長宣言文
12. 認知症普及啓発冊子「みんなで認知症サポートブック」
認知症フォーラムin宇治の参加者を対象に配付、認知症の人の視点に立った街づくりをテーマに作成。宇治市の認知症事業の紹介や認知症サミット日本後継イベントの報告について掲載している。